



(平)

跡が立地する丘陵間に形成された谷底平野に位置する。遺跡周辺は、一九八五年度より一九九三年度まで国道四九号線平バイパス改築工事に伴う発掘調査が断続的に行なわれ、その歴史的環境が明らかになりつつある地域である。これまでの

福島・番匠地遺跡

ばんしょうち

- 1 所在地 福島県いわき市内郷御殿町番匠地
- 2 調査期間 一九九一年(平3)～一九九二年
- 3 発掘機関 勸いわき市教育文化事業団
- 4 調査担当者 和深俊夫・矢島敬之・末永成清
- 5 遺跡の種類 水田跡・河川
- 6 遺跡の年代 縄文時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

番匠地遺跡は、いわき市街の南西約二・五km、阿武隈山系から太平洋に向かって延びる支丘陵(中世城館の久世原館が占地)と、清水遺

調査の成果として、久世原館丘陵からは古墳時代後期から平安時代にかけての多数の竪穴住居跡の検出と「磐□郡□」や「常」の印章鋳型の出土、清水遺跡からは平安時代を主体とする竪穴住居跡や掘立柱建物群、精錬炉・鍛冶炉・木炭窯が検出され、これら製鉄関連遺構と磐城郡衙との関連性が注目されている。

番匠地遺跡では調査の結果、二枚の水田跡と縄文時代の自然河川が二条検出された。下層水田跡は弥生時代中期のもので、一九八七年に検出された水田遺構の大畦畔を一部補完する関係にある。上層水田跡は中世以降の所産であり、畦畔・溝・杭列等の施設が検出された。今回、木簡が出土した第一二号溝は、これら上・下水田遺構の中間層(標高一四・五m)で検出された。長さ約七〇m、幅約三m、深さ約〇・五mを測り、調査区の中央を南西から北東方向へ走る。

溝に伴う水田遺構は検出されなかったが、化学分析結果よりその存在は確実であり、溝は水田の用・排水施設と考えられる。溝内からの遺物の出土量は少なく、整理用コンテナ一箱ほどの土師器片、十数点の手捏ね土器、三点の土馬・蚕状土製品、斎串、刀状・天秤棒状の木製品、建築部材等が出土したにすぎない。文字資料は木簡二点のみである。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「永加羽

(345)×17×9 019

現状は下部が欠損しているが、かなりの長さを有した木簡と思われる、その上端部のみは物品名を記載した付札木簡と考えられる。類例として、金沢市西念・南新保遺跡出土木簡「須留女×」(二八五×二三×七)があげられる(金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』一九八九年)。内容については、物品が何を意味するのかが今のところ判然としない。時期もまた、第一二号溝内の出土遺物が古墳時代後期から平安時代の土器(主体は七世紀後半～八世紀前半)を混在しているため特定することは困難である。木簡の内容とともに今後の検討課題としたい。

本遺跡は、縄文時代において自然河川が存在したのち、弥生時代中期には水田開発が行なわれ、以後ほぼ間断なく水田耕作域となっていたものと考えられる。前述のとおり、周辺丘陵には磐城郡衙との関連が注目される製鉄遺構・遺物が検出されており、今回の木簡出土の意義もこれら遺跡のもつ総合的な性格の中で検討していかねければならないと考える。

釈読にあたり、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

「いわき市教育文化事業団『いわき市内発見の木簡』(『発掘ニュース』三八 一九九三年)

(矢島敬之)

秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所編

『秋田城出土文字資料集Ⅱ』

秋田城跡調査事務所は一九八四年に『秋田城出土文字資料集Ⅰ』として、それまでに出土した漆紙文書と墨書土器の集成を刊行したが、今回それに続き、秋田城跡出土木簡と『Ⅰ』以後の漆紙文書をまとめた報告書を刊行した。

木簡は、一九八九・九〇年に行なわれた外郭東門付近の第五次調査を中心に三二一点が掲載され、漆紙文書とともに全点に写真と解説を付す。

『木簡研究』一・八・一二にも報告が掲載されたが、今回その全貌が明らかになった。

A4版 194頁、一九九二年三月刊

頒価 三〇〇〇円、送料 四五〇円

照会先 〇一一 秋田市寺内字大畑二二一

秋田城跡調査事務所

TEL 〇一八八—四五一—八三七